

---

# 真弓が真由美になりました

かとう みき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真弓が真由美になりました

### 【Nコード】

N2653BA

### 【作者名】

かとう みき

### 【あらすじ】

ある日目覚めたら女の子になっていたおっさん。真弓正孝。……最近までダラダラ遊んでたバカ女がイキナリキャリアウーマンにおっさんが若い娘になって戸惑い炸裂。取り敢えず仕事をします。よるなさわるな俺は本当はおっさんなんだ!!。微かにコメディ?と恋愛?の要素含みます。

ジャンルは恋愛ですが進展は殆ど有りません。

## 1話 事態を把握しよう

どうしよう。

真弓正孝は悩んでいた。  
いや。

今は真弓正孝ではない。

その事に。

悩んでいた。

目覚めれば、見た事もない部屋だった。

アラームを鳴らした携帯は、何だかキラキラしていた。ギラギラと云っても良い。

12畳か、いや16畳はある部屋だった。フローリングの床に畳スペースがある。炬燵の上には駄菓子（だかし）の袋と飲みさしのペットボトル。

だらしなく炬燵で寝ていたらしく、その所為か少し寝違えたために首の後ろが痛んだ。

上体を起こすと共に肩から零れた長い髪は、赤に近いほど茶色い。それを思わず手のひらで掬い、恐る恐る引つ張った時は、内心悲鳴を上げた。

窓にはオレンジのカーテン。まだ、早朝で射し込む陽射しも微妙

な明るさだった。

その壁際にベッド。大きめなシングルかセミダブルか。薄いピンクの毛布と羽布団らしき白が、くしゃりと乱れたまま放置されていた。

ベッドの向こう、部屋の角にある机は、勉強机の様だった。乱雑に教科書やノートが重ねられていた。

机の前方の壁を辿ればベッドに戻る。机の右の壁を辿れば扉があった。その途中にハンガーがいくつか。コートとダウンジャケット。セーラー服っぽい制服らしき服は何処かで見た事がある。有名な学校の制服だろうかと考えた。

何故か隣にスーツ。

剥き出しの洋服が後何着か無理矢理重ねて下げている。

扉が面した壁には恐らくは作り付けのクローゼット。作り付けの書棚。書棚には適当に並べられたマンガが数冊と箱や袋が適当に置かれていた。

次にまた扉。

そこで体勢を変えて背後を見やれば、テレビ画面とスピーカーのみ。

壁と床、調度品は悪くない品に見えた。作り付けのクローゼットや棚の材質も艶消しの良いものに見える。かろうじて解るのは黒檀の勉強机だろうか。

特に物が溢れている訳ではない。逆に少ないくらいだったが、乱雑な印象が強い部屋だった。

社会人なのか学生なのか微妙な印象も受ける。

この乱雑さを見れば、卒業して就職したにも関わらず、制服や教科書を片付けていない……という事だろうか。

どうしよう。

また考えて、真弓は頭を掻き繕る。長い髪にビクリとして、頭から手を離れた。

畳についた手を見て、また固まった。

爪がゴテゴテと飾ってあった。

携帯をもう一度見れば、日曜日だった。

何とかアラームとカレンダーを見る。カレンダーには特に何も予定は上げられていなかった。

アラームは毎日かけられている様だった。

存外、規則正しい生活なのか？ 炬燵は出っっぱなしなのに。

そう考え乍ら、立ち上がった。まずは奥の扉をそつと開いて覗き見る。

廊下と、扉が左右に2つずつ見えた。

廊下の長さは微妙だった。

庶民的とは云えない広さ、しかし上流としては微妙。まあまあのお金持ちなのは間違いないだろうが、ランクが判り難かった。

そつと扉を閉めた。一応クローゼットを開けた。やはりクローゼットだった。大量の洋服やドレスがかけられていた。

ドレスは一応フォーマルと云えるものもあつたが、正直婦人服には詳しくなく、どの程度の物かは解らなかつた。

他の箱等覗けば、帽子やバッグ、靴がところ狭しと積んである。

書棚の箱も同様だった。クローゼットに詰めたら、洋服が皺になるから追いやられたのだろう。

何故か袋や一部の箱には本が入っていた。

明らかに新品で固い内容の本は、恐らくはプレゼントか何かで、貰つた本人はそのまま放置したと思われた。

貴金属やアクセサリは、特に目立つものは無く、どうやらドレスコードがフォーマルのパーティーに出る事は無いのではと見当をつけた。

イメージとしては中流家庭の、裕福なお嬢さんのクローゼットだ。

次の扉は脱衣場らしかった。当然、そこは浴室に繋がっていた。

非常に苦悩したが、入った。

頭は痒いし、髪はベトベトと絡みつくし、体も痒い。

耐え難く不潔だった。

疲れきつたがサツパリとした。室内に時計は見当たらない。

携帯を見れば7時になっていた。

空腹を覚えていた。



## 2話 取り敢えず流されてます

内心戦々恐々としていた。

しかし、若い娘は……年頃の娘は、家族にベタベタしたりしない。と思った。

少なくとも我が家はそうだった。

平静を装い、ドキドキしながら部屋を出た。

ギョツとした。

「まゆみ？」

バレた！？

何がどうしてバレたんだろう？と思った。呆然とした。しかし、安堵もした。相談出来るかと考えた。

だが勘違いだった。

廊下の左手のドアから出て来た青年は欠伸をして云った。

「珍しいな。こんな朝早く。腹が減って起きたってところか？」

「……………うん。そっちこそ、日曜なのに。」

どうやら、娘の名前はマユミと云うらしい。紛らわしい名前だったが、名を呼ばれて直ぐに反応出来るのは良い事かも知れない。



それはそうだろう。身内の身体に別人が宿る等とは誰も思っまい。  
一瞬希望を抱いたのが愚かだったのだ。

「ん〜昨日昼間寝てたら夜眠れなくてな。」

「……………そう。」

だらしない。

しかし日曜だ。目くじらは立てるまい。

そう思った。

思った側から否定した。

う。いや。下手に関わるのは不味い。出来るだけ喋らず様子を見よう。

「どうした？メシ食うんだろ？」

「あ……………うん。」

立ち止まったまま考えていると、青年が振り返って欠伸混じりに云った。

慌てて後を追った。

母親らしき人も「珍しい」と云った。

どうやら寝坊が当たり前らしかった。

「まあ明日から社会人ですものね。自覚が有るのは良い事よ。お父さんに恥をかかせないのよ？全く、コネ入社なんて……………」

「……………はい。」

ちよっとホツとした。

色々教えて貰って助かった。

母親は更にお小言混じりに情報をくれた。

非常に助かった。

しかし呆れた。

この娘は大学を卒業している。

高校の制服が壁に掛けてあったのは、どう理解したら良いのか悩んだ。

母親はそれについても言及した。

「制服もせっかく洗ったのにまた壁に掛けて。何年経つと思っの。

捨てないならもう一度洗うから出しなさい。他のもよ。」

「……………はい。」

呆然とした。

だらしないにも程がある。

そう思った。

就職先はよく知る会社だった。

部署もよく知っていた。

偶然だろうと思うが。

顔が引き攣った。

「お兄ちゃんもよ？」

矛先が青年に向かった。

どうやら兄だった。

「ご馳走さま。」

青年は逃げる様にダイニングを出た。

「もっつ。智輝は何で……………」

兄の名前はトモキと云うらしかった。

母親はボヤイてまたこちらを見た。

まだ有るのか？

流石に食傷気味だったが、母親は微笑んだ。

「真由美が就職してくれて良かったわ。ちゃんと真面目に働くのよ？」

「はい。」

「あらあら。お返事まで良くなって。本当に良かったわ。」

上機嫌だった。

先刻まで延々お小言を云っていたのに。

云いただけ云ったから満足したらしかった。

部屋の掃除をした。

勝手に触るのはどうかとも思ったが、耐えられなかった。布団も窓を開けて干した。

壁に掛けられた洋服は、制服も含めて洗濯に出した。ついでに毛布やシーツも依頼した。クローゼットや書棚も整理した。

「洗濯したら今度こそ仕舞うのよ！」

「はい。」

部屋も掃除しなさい。と、やる訳が無いだろうと考えているのが丸解りの眼差しだった。

洗濯物を渡した時の視線が痛かった。

母親からあんな目で見られる若い娘がいるのかと啞然とした。

しかも大学で何をしていたのかと云いたい机。

嘆息して黙々と整理した。

机の上に山と重なった本や教科書、バインダー、ノート。散らばった文具を片付けて、パソコンが出てきたのには呆れを通り越して感心した。

いつそ見事な迄のだからしなさであった。

徹底している。

掃除により、この身体の持ち主のデータを図らずも入手した。

物が少なかったから昼には済んだ。最後に掃除機をかけ拭き掃除をした。

勉強机はやはり黒檀だった。

もう一度シャワーを浴びて、クローゼットからまた地味な服を探して着替えた。

埃にまみれたジーンズとシャツを洗濯に出させて貰い、そのまま

ダイニングで昼食を取った。

満足した。

「まあまあ。本当に心を入れ替えたのね。」

母親の人も満足そうだった。

午後はゆったりと過ごした。

考えるのを拒否する気持ちも確かにあった。

どうして。

つい考えた。

眉を寄せた。

多分顰めっ面で唸った。

どうして、こうなったのか。

こうなる前の自分はどうなったのか。

昨日は確かに元気だった。

確かゴルフに行った。

接待だった。

まさかゴルフボールが？

それが頭に当たって死んだとか。考えたが否定した。  
帰宅した記憶があった。

更に思い出そうとしたが、上手く行かなかった。

携帯を握り締めた。

非表示なら。

首を振った。

自分に電話をしても意味は無い気がした。

自分は此処にいるし、出たら出たで恐怖だ。

自宅に掛けるのはもっと問題だった。

若い女の声で電話した日には。

妻や娘が何を思うかと、溜め息を吐いた。

現在は佐倉真由美。女子大を卒業したての明日から社会人。会社はコネで入社したが、資格自体は割と持っていた。

そう云えば名前は忘れたが、業務の新人の資格を見て経理にくれと云った様な。

しかしコネだし期待出来そうに無い娘だからやめた方が、とか云われた様な。

確かに、期待など出来なさそうな娘の生活を垣間見た。

成る程。彼も中々人を見る目が養われた様だな。

うんうんと頷いた。

昨日までは、真弓正孝。

この娘が明日から勤める会社の経理部部长。42才。同期の出世頭。中年通り越して高年間近。いやまだまだ若いと云い張るのが年寄りの証。

つまり。

現在うら若き女性の肉体に入り込んだ、オッサンであった。

しかし、自分の身体になってしまえば、色気も感じ無いのか、はたまた枯れたオッサンなのか。

午後はゆったり、苦悩したり、読書したり、パソコンを弄ったりして、それなりに充実した時間を過ごした。

枯れたオッサンは夕食は何時だろうと考えた。  
携帯を見れば18時。

まだ早いだろうか？

若い身体だからか、この娘が食いしん坊なのか、食事への欲求を  
久しぶりに感じる1日だと思う。

取り敢えず階下に下りてみようかと、扉を開けたら兄の部屋？  
から慌てた様な声があった。

？

少し揉める気配もしたが、次第に収まった。

何だったんだろう？

不審を覚えたが、下手に関わってはボロが出る元だ。スルーして階下に下りた。

母親の姿は無かった。

しかし料理は盛り付けるだけだった。

用意して待ったが、戻って来ないので申し訳ないが先に始めた。

空腹が我慢出来ないのは、何年振りだろうと考えた。

食べている途中で母親が上階から下りてきた。兄？が一緒だったので、もしかしたら先程の揉める気配はこの二人だったかと思った。

日曜日だと云うのに、母親は兄を病院に連れて行くと告げた。

青年は朝見た時より気怠い雰囲気で、何だか妙な倦怠感を纏っていた。

「大丈夫…夫？」

「大丈夫。ごめんね、一人で留守番出来る？」

「???はい。」

奇妙な違和感を残して、二人は出掛けた。

あんな感じ……だったか？



首を捻ったが、まだ会話らしい会話もした事はない。  
顔も、朝一回見ただけだ。

気の所為だろう。  
そう思った。

朝。  
非常に困った。

何とか化粧を試してみた。

しまった。こんな罨が。

知識と実践は違った。  
何度目にした光景であっても、それが簡単そうに見えても、  
出来る出来ないは、また別問題だった。

口紅だけにしよう。

比較的大人しい色を選んだが。  
口紅を塗るのも大変だった。

「おはよう………ございます。」

「おはよう。」

「おはよう。早いね？ああ、今日から仕事か。頑張ってるね。」

見知らぬ顔が増えていた。気さくな青年は30才になるやならず  
というところだろうか？

相変わらず気怠げな青年が眉を寄せた。  
家を出る時間を尋かれて答えたら、次には化粧品は無いのかと尋  
かれた。

「部屋に。」

朝食の席で、やたらと青年を構うと云うか、世話を焼く感じの、  
新顔は姉の婿らしかった。しかも内科医とかで、昨日は休日当番で  
開いていたとか。

日曜に病院に行くとは相当悪いのかと感じたが、医者が身内で近  
所で開業しているなら気軽に行く事も有るかも知れないと納得した。

食事を終えたら、兄が部屋に誘った。  
何故か。

青年はメイクの仕方を教えてくれた。

しかもオフィス仕様のナチュラルメイク。

「意外な才能だな。上手いもんだ。真由美ちゃんは、ナチュラルメ  
イクは苦手なんだ？」

感心する義兄に素っ気なく頷く兄。真由美はただ、誤魔化す様に  
笑うだけしか出来ない。

「まだ時間は大丈夫の様だね。やってみて。」

助かる。

非常に助かるが。

この青年は何故化粧技術や化粧品に精通するのだろうか？

困惑しつつ、家を出た。

### 3話 世間的には大企業の筈ですが

見慣れた入社式で、懐かしい場所に座った。

髪の色はどうしようも無かったが、兄である青年がキチンと纏めてくれたお蔭で、随分と地味になり 所詮は当社比。最初に比べたら…だが 悪目立ちはしていない。

退屈な挨拶が続いて、語るべき何事も無い入社式…なんてものは当社には無い。

最初は普通に退屈な挨拶が少し有り、普通に会社概要がスクリーンで流れ。

会長が挨拶をする。

「希望の部署に配置された人もそうで無い人も、ようこそ！さあて君たちに最初の試練を与えよう。コレと同じものが、この建物に20個隠してある。見つけた者は給料2割UP。希望部署に移動も出来る。因みに、見付けられなかったら一年間は罰ゲームとして、毎朝の社内清掃。屋上の庭園の世話、具体的には草むしりや肥料や水やりも含むので体力増強したいならオススメだ。」

新入社員達はざわめいた。当たり前だが。

未だにマユミもこの風物詩がよく理解出来ない。

しかし、悪くない面も無いではない。

他にも色々と罰ゲームと云う名の雑用が上げられる中、マユミは一人冷静だった。

「おめでとう！一番乗りだな！」

そりゃそつだ。

マユミは自分が隠した宝箱を見付けただけだった。

経営会議で適当に配られた宝箱を、マユミは二つ隠した。

部署ねえ。どうするか。別に業務課でも良いが。

「さて、君は何が欲しい？」

「取り敢えず考えときます。」

「そうか。じゃあ、決まったら誰か部長以上の者に云えば話が通る様にしよう。」

会長の言葉にマユミは頷いた。

宝箱をゲットした者は、そのまま所属部署に案内される。マユミは特に希望を述べなかつたから、最初に配属された管理部業務課に連れて行かれた。

入社式の日も、通常業務は行われている。新入社員以外では課長以上の役職者があの場に立ち合うが、その殆どはこうして宝箱のゲット者を「迎え」る為だ。

因みに部署希望は早い者勝ち。

本来受け入れ予定の人数以上は、原則として引き受けない。

しかも会長は気が向いたら特定の新人をたらい回しにする癖があ

る。

マユミは以前の自分が被った被害を思い出した。押し付けられた部署も可哀想だと現在は理解するが、当時は泣きそうだった。

会長のお気に入りになると苦勞するからな。

それでも男だった本来の人生では、出世欲や上昇指向とは無縁では無かったから良かったのだが。

若い女性には迷惑な話だろうとマユミは思う。

そもそも、この状況はいつまで続くのだろうか？

例えば何かしらの事故で自分は此処にこうしているのか。

元の自分はどんな状態なのか。

この身体の本来の持ち主である娘さんの「心」とか「魂」とか呼ばれるものは何処に有るのか。

いきなり元に戻るとして、娘さんが苦勞しない様に……目立たないのが肝要だな。

新人がいきなり増えても、教育する手間が増えて面倒なだけだ。

しかし宝箱ゲットした人数くらいなら仕事を叩き込むのも手間は手間だが、業務に支障は無い。

普段と体制を殆ど変えずに新人教育を出来るのが、宝探しイベントの最大のメリットである。

大多数の掃除や雑用部隊からは、少しずつ暇を見付けて指導し、見所が有りそうな者から仕事を増やして行くのだ。

一年後まで雑用部隊に残る者は、そうは居ない。

故に、初日からマユミは仕事を与えられた。  
マンツーマンで指導員が付く。

たらい回し経験が有る上に、経理責任者として業務は関係が強いし、正直担当者に依頼するよりも自らの権限で訂正して報告のみで済ませる方が楽だったりする。

自分が処理するのは誉められた事では無いが、決算の時期などはいづい手を出す悪い癖がマユミには有った。

待て待て。この数字おかしいだろ。これを支払い処理するのか？本気か？

マユミは苦悩した。

仕入処理を簡単に教わり、流れとして支払い予定表の作成の仕方を習った。勿論、仮の支払い予定表だが。

そこに丁度、経理からチェック済みの実際の支払い予定表が「回され」て来た。

後は支払うだけだ。

金銭を扱うのは経理だが、支払い処理は業務ソフトの確定ボタンで「実行」される。

いつの間にか、業務の管轄になった作業のひとつである。

誰だ。これ決裁したのは。

押印された書類は実行しても良いと告げている。

マユミはしかし、それを実行するのは許しがたいと拒否感が募る。

教えられた事を従順にこなすだけの積みりだったのに、早々に挫折したマユミだった。

とは云え、新人が引つ掛かる理由も必要だな。

「山里さん。経理部に回す前に確認するのは前残と当月請求額でしたっけ？」

「そうそう。この画面で確認して、で個別仕入はその時々で確認して有るから請求額と一致するか見て、で、回します。経理が確認してOK出たら、つまりこうして押印された書類が戻って来たら、予定表を確定します。確定したら支払い処理の実行になるから気を付けてね？」

「はい。」

従順に頷き、マユミは尋ねた。

「例えばこの会社だと……。あら？あの……。これは本当に実行して良いのですか？」

教わった検索方法で、問題の会社の画面を呼び出して、マユミはわざとらしく首を傾げた。

「何？」

請求額も請求書も一致している。

しかし、前回の確定支払い予定表とは一致しない。

つまり、業務の誰かが、請求書に合わせて数字を訂正しているのだ。

何度注意したら、この手のミスは無くなるんだろう。

先方に合わせてどうするのか。勿論こちらのミスの可能性も有る



が、他所の会社の云うがままの数字に変更する人間の考えはマユミの理解を超えていた。

しかし、割とそれをやってしまう人間は多い。

「ん？ああ。大丈夫。それは先方に確認した数字だから。」  
「……………」

莫迦が指導員だった。

マユミは目眩を覚えた。

「いや。待って下さい。では前回の確定金額と残高。今回管理課からの数字と合わせたら、本来お支払額は、こちらの数字ですよ？過払いでマイナスですから繰越しましょう。先方に確認したのなら管理課と経理課の両方の押印が必要では？」

「…………でも別に経理の決裁は下りてるし、気にしないで。」  
「気にしなさい！」

余りのいい加減さに、マユミは叱りつけた。

「何を云ってるんです。会社のお金。しかも他社に関わる問題ですよ？おざなりにしてはイケません！」

管理部は総務部の隣に有り、総務部を訪ねて来た経理部の部長補佐が通りかかった。

業務課長と管理課長。経理部の部長補佐と同様に、総務部を訪ね様と部長室を出たばかりの管理部部長も鉢合わせ。

マユミは思い切り注目を浴びた。

しまった。

せめて、それが何カ月か後ならば、そこ迄目立つ事も無かっただろう。

しかし、マユミには一目瞭然の誤りだが、何故だか彼らは解らない。

管理も業務も自分達の関わる場所しか見ないからだ。経理の高峰もそうなのは問題だが、部長補佐の高峰は数字に強い部下を呼び出した。

彼はマユミの部下でも有るが、今は初対面だ。

「まずは、先月の時点で赤伝が発生してます。先方はそれを仕入処理してますが、当社から見れば此れは売上では無く仕入の赤伝票です。先方が仕入たからと云って、合わせる必要が無いのはご理解戴けますか？」

何度も説明して、やっと理解された。いや、理解しきつて無い者も居たが、マユミが正しいのは理解された。

「ですから、こちらの支払いは不要です。寧ろ、現在その赤伝の為に、過払いが発生していますから、次回の支払い額から差し引きすることになります。」

「そうなるのか？」

「……彼女が正しいですね。」

部長補佐の高峰が部下の木崎に問いかけ、木崎は頷きつつマユミ

をキラキラする眸で見つめた。

木崎は人付き合いが苦手、と云われるが……実際は単なる無能嫌いで、仕事が出来た人間が大好きな奴だ。

但し、彼にとって仕事が出来ると云う事は、イコールで経理関係の仕事を理解する事である。

例えば交渉術に優れた高峰などは「超無能」な上司であった。

しかも小さな重箱のスミに拘るタイプだから、今回の様なミスは放置しても木崎が見付けただろう。財務としてはマダマダだが、通常業務は信頼出来る部下である。

金額が小さければそれでも良かったが。

見過ごすには額が大きかったし、他社に関係する問題だから恥ずかしくて放置したく無かったのだ。

所詮は仕事人間。余計な事はせず地味に目立たず云われた事だけ従順にする……などと云う野望は、一日目にして潰えた。

ある意味では歯車に成りきれない私の強さを抱えるマユミは、会長のお気に入りだった。

この会社の会長は、大企業のトップとしては多少変わった趣味の持ち主だった。

二人共、寧ろ中小企業の社長と部下ならバッチリな相性だったかも知れない。

真弓正孝。昨日死亡したと云う同期の出世頭の葬儀に向かう為に、腕章や香典などを求めて総務部に向かった者達は、彼に似た話し方をする新入社員と出会った。

面白そうに、会長が業務課を覗いていたのには、誰も気付かなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2653ba/>

---

真弓が真由美になりました

2012年1月13日01時45分発行